

追悼・新崎盛暉氏 米軍の沖縄永久支配との対決

吉田 正司



沖縄大学の元学長・新崎盛暉もりてる氏が去る3月31日午後、肺炎のため沖縄・南風原町の病院で亡くなった。82歳、沖縄現代史研究の第一人者だった。

彼の第一の功績は、沖縄が米軍に永久支配され、そこで軍事基地が自由使用されている事実を鮮明化し、闘いを呼びかけたことだ。それなら、他にも同様の指摘や見解が多数あったと思われるかもしれない。しかし彼は、その沖縄の犠牲によって初めて日本（本土）側の「戦後」での平和と繁栄が可能だった——と見抜いた。



たいていの人々は沖縄が苦境にある（あった）といつても、「戦後」日本が沖縄を構造的差別の下に置いてそれを踏みつけたわけではない、と考えている。なかには菅官房長官のように、「沖縄がたいへんだったといつても、日

本だって戦後はたいへんで、どちらも同じだ」と平然と述べる人もいる。実はこの「戦後」の日本からは、沖縄の実像がスッポリ抜けている。

この点に関連して元外交官・孫崎享氏は、米軍は1951年当時、日本には望むだけの望む場所に、望む期間だけ駐留する——と公言していたと述べている。沖縄は日本と切り離されて基地自由使用の下に置かれた、と新崎氏は鋭く指摘し、米軍による「永久支配」だと喝破したのである。沖縄では今でも「基地間移動」と称して軍人が道路を行軍したり、軍用車が（誤って）学校の校庭に侵入したりする。どこが「どちらも同じ」だというのか。

米国は戦勝による領土の併合・拡張否定を標榜しており、戦後日本を直接占領はしていない。だから「終戦」＝対日講和であるサンフランシスコ条約締結（1952年）によって、「進駐軍」＝占領米軍は日本から撤退すべきであった。だが当時のダレス國務長官は、「日本側から駐留継続を求められた」として未だに駐留している。新旧安保条約によるシバリさえかかっている全土基地方式だ（同条約にも日米地位協定にも、どこに基地を置くかが書かれてい

ない）。

沖縄に至っては、その後の日本「本土」復帰（1972年）後も基地自由使用が続いている。こちらは核兵器撤去をちらつかせた米国側の策略によるものだ。沖縄は日本「本土」以下の存在であり、今もって「戦後70年」ではなく「戦後ゼロ年」だ。安倍首相が「戦後レジームからの脱却」というのなら、沖縄の基地自由使用解消が先決だ。それなくして「戦後」は終わらない。首相は戦前回帰めざして改憲策動しているが、「戦後レジーム」の核心は沖縄の永久支配にこそある——ことを新崎氏は明白にしたのである。

米軍の対極に沖縄民衆

第二の新崎氏による功績は、「沖縄民衆史」論を明らかにした点だ。彼は、第二次大戦時・沖縄戦とその後も終わらずに続いている「戦後」期に島ぐるみ闘争など、沖縄住民が闘い続け自らを確立してきた（させてきた）民衆史が、米軍に抵抗してその対極に寄せては返す波のように打ち立てられてきた地平として確立された。「寄せては返す波のように」というのは元那覇市長の瀬長亀次郎・沖縄人民党委員長（1901～2001）の著書末尾にもある表現。だが、沖縄民衆が対外的に自己形成してきたというのでは「沖縄民衆自身の内面の論理がないではないか」などという批判もある。しかし仲里効氏（南大東島生まれ。1947～）も、沖縄「民衆のエネルギーは、沖縄戦の

体験とアメリカの占領体験によって培われた意志の形であり、領土的思考や国民主義的な視線の〈外〉を示唆している」という。新崎氏と類似の考えであり、沖繩の「内面の論理」が領土論的に傾斜するのとは反対だ。

第三に、彼はこの視座からの帰結でもあるが、沖繩独立志向的な多数の発言をしていた。繰り返される日本「本土」側からの構造的差別・抑圧からの離脱・解放を求めて、当然にも独立論が次第に沖繩では強くなっている。独立願望は当然だが、その実現のためには覚悟がある。だから彼は「もう独立しかない！」と居酒屋で独立論をぶちあげるだけではダメだ、と主張した。これが独立反対論ではないかと誤解されたことがある。しかし彼には次のようなことがあったのである。

「あなたたちからは言われたくない」

彼が「本土」の『週刊金曜日』誌にある論考を送った時、同誌編集部が「沖繩はもはや独立すべきだ」という大見出しとその趣旨のリード文をつけた。その組み版がFAXで送られてきた時、彼は激怒した。「あなたたちやマトウ側（日本「本土」側）から沖繩は『独立すべきだ』とは言われたくない！ 独立すべきか、独立すべきでないか、は沖繩側が決めることだ」と。

編集者は善意でそう書いたのだが、日本「本土」側は中立表明かまたは沈黙すべきだった。沖繩が独立したら資源がないからそれはすべ

きでない、などと心配してあげる日本人もいた。これも沖繩の自己決定権に対する侵害だ。日本側も沖繩側もない、人間として対等だ、というわけにはいかない。そもそもこの独立論とその志向自体が、日本「本土」側の不当な抑圧と構造的差別策の産物だ。それを日本「本土」側から「待った」をする資格もなく、独立を薦める資格もない。



沖繩・一坪反戦地主会関東ブロック総会で発言する新崎氏（写真提供は筆者）

ものを読んでいいのか！。その友人は、「読むか、読まないかは私の自由」だといって対抗した。たしかにその友人は新崎氏の著作も読んではいた。「沖繩はたいへんだな」と思っている、〈忠告〉したので。

新崎氏は沖繩のアイデンティティを強調していたが、他方では沖繩にいないで日本「本土」で「あるべき沖繩」について語ることにしても厳しかった。彼の著書『未完の沖繩闘争』では、その人物について強いトーンで批判していた。かつて島袋全発（1888～1953）は「戦後」、故郷の沖繩に戻り、その現実の渦中で泥にまみれ苦悩していたことを考えると、〈きれいなこと〉を言うべきでないという批判であろう。

彼はあまり笑わなかった。沖繩ではそのような人をカマジサーというが、「いつも怒っているみたいで怖かった」と言われていた。笑えなかったのかもしれない。彼は両親が沖繩出身者だったが、「本土」で生まれ、そこで強い違和感を抱いて〈沖繩へ帰った〉。いったん「本土」へ戻ったが、彼は「充電するために来たんだ」などと言っており、その時「僕はヤマトウと沖繩の間で宙吊りになっているみたいだ」とも語っていた。その後、まもなく沖繩へ戻った。そして沖繩にまみれて、米軍に抵抗する沖繩民衆として彼は生きた。

（よしだ・せいじ）沖繩・一坪反戦地主会関東ブロック